

社会変動と

社会学的視点

星 明

はじめに

社会学とは何か。それをどう規定しようともある領域を対象とし、ある方法論をもつことは確かである。領域とは社会的行為から全体としての社会までであり、方法論とは歴史的方法、構造的方法および歴史Ⅱ構造的方法の三つである。社会学者は各々任意にある領域を設定し、任意にあるパラダイムを採用する。そして次元を定置したのちにも、その分析レ

ヴェルは歴史Ⅱ経験のレヴェルから普遍Ⅱ一般のそれまで、いわば具体から抽象までの隔たりがある。この隔たりは、時として対立と結びつく。両極端はその間のどこかに支点がある。それがなければ落ちてしまう。

さて、この小論の企図するところは社会変動論へのいわば視点の視点といったものであり、それ以上のもではない。それ故、均衡モデル（機能的モデル、機械的モデル）、弁証法的モデルといった分析モデルを使用して現実を説明していない。ただ社会の変動を社会学はどういう次元で考えるかということの問題にしているにすぎない。また、加えて社会学的視点とは何か、という問いに対する筆者なりの考えの一端も述べている。

一、社会学的視点

社会学者は価値よりもむしろ真偽に関心をもっている。価値に焦点を合わせるとしても真偽が前提となる。社会的リアリティは、もちろん価値と真偽との両側面から認識されるべきことであるが、社会学の現段階ではまだまだ今後の課題であろう。現段階において、乱暴な言い方が許されるならば、価値および真偽のカテゴリーの統一はマルクス主義の正統派の唯物弁証法（飽くまでも弁証法の一つである）に見られるであろう。右と次元は異なるが、M・ウェバーの社会科学方

法論は社会科学と社会政策とを含んでいる。社会科学は事実認識（実証的認識）の次元であり、社会政策は目的論（規範的認識）のそれである。現在、社会学者の多くは事実認識、つまり真偽のカテゴリにウエイトを置いている。社会学が実証科学といわれる所以がそこにある。それは当然よりもヨリ存在を、評価よりもヨリ説明を重要視する。

positive ということばは肯定的という意味をももつが、このことはある価値の元に社会的リアリティを肯定するというのではなく、むしろそのリアリティをあるがままに観察し、分析するという意味に理解したい。A・コントのいう実証哲学、つまり後の社会学はそれまでの伝統的哲学の形而上学的な性格に対する反論として生まれてきたのである（Martin-dale, D., 1960, 訳、p. 41）。

実証的認識の次元は個別化的から一般化的までの広いレンジにまたがっており、現在の社会学の段階ではその距離ははるか遠いと言わざるを得ない。個別化的とは時間と空間との限定をもつものであり、一般化的とは超時間的・超空間的である。理論とは、R・S・ラドナーによれば、体系的に連関している立言の集合であって、経験的に検証可能なある法則的一般化を含むものである（Rudner, R., 1966, 訳、p. 15）。具体的には調査結果の記述や解釈のレヴェル（いわば小範囲の理論）から、これらの個々の経験的規則性を抽象して検証可能な（同じ事象については justifiy される）経験的一般化

のレヴェル（中範囲の理論）を経て、これらの経験的一般化をヨリ高次の抽象の中で概念化しそこから逆に多くの事象についての演繹が可能である演繹体系のレヴェル（大範囲の理論）に至るまでの区別ができるであらう。この演繹体系に達すると原理的にはそれより高次の理論はなくなる。しかし、最も進んだ科学の一つである物理学においてさえも量子力学と相対性理論との二つの理論が最も高次のレヴェルで併存している。そして量子力学で相対性理論を説明することができないし、またその逆も不可能だという。この二つの理論を同時に説明するヨリ高次の理論構築が物理学の課題になってくるのである（Zetterberg, H., 3rd, 1966, 訳、p. 12）。どのような理論レヴェルに照準を合わせるか、どのようなパラダイムの元にどのようなアプローチを採用するか、またその準拠点をどのような方向へ移動させるか、といったことは研究者によりさまざまである。たとえば、中範囲の理論を提唱した R・K・マートンの場合、大範囲の理論は括弧入れにし、中範囲の理論に焦点を合わせつつ小範囲の理論を中範囲の理論に統合することを試みてきている。かれは言う、……こんにち社会学理論といわれているものの大部分は、特定の変数と変数の関係の、明瞭な、検証可能な叙述から成立しているというよりは、むしろなんらかの形で考慮する必要のある変数の諸類型を示唆するもので、データに対する一般の方針から成立している事実は認めなければならない。概念の数は多い、

だが確認された理論は少い。観点は多いが、定理は少い。

方法は多いが、成果は少い、と (Merton, R., revised 1967, 訳、1961, p. 7)。かれの業績は個人的適応様式のタイプの分類、準拠集団などに看取できるところである。この中範囲の理論はいわば対象を中距離から見るところである。それに對して近距離から細部に渡ってみるのが伝統的な歴史学であり、逆に遠くからみるのが自然科学である。社会学は歴史学のよるな個別化科学と自然科学のような普遍化科学との中間に位置するものである。あまりに具象的でありすぎず、また逆にあまりに普遍的でありすぎずということである。つまり類型学としての社会学である。これら個別化科学、類型学、普遍化科学相互間の区別は絶対的なものではなく、むしろ相対的なものであり、その類型の中においてもある程度のレンジがある。M・ウェバーやE・デュルケームの業績はここである。類型学のカテゴリーに入る。ウェバーの三つの支配類型は歴史寄りの類型であり、四つの行為類型は普遍化科学に近づくデュルケームの自殺の類型は具体性をもち、社会類型は抽象度が高い。また、T・パソンズのパターン・ヴァリアブルやAGIL図式はヨリ抽象度が高いものであろう。このように類型といってもその範囲はさまざまであるが、これまでの社会学の偉大な業績は全体的にみればこの範囲に入り、こういった傾向は今後も変わることはないであらう。

11、社会變動の分析次元

社会は不斷に動いている。昨日の社会は厳密には今日の社会と同じではない。完全に静止した (stable) どのような社会も心に描くことは非常に困難である。たとえアフリカの奥地でさえも家族の構造は変わる。通常よりヨリ多くの子どもが生まれ、かれらが自分たちの小屋を欲しがったり、あるいは病気が生じ家族を全滅したりするのである (Hesman, K., 1963, p. 130)。では安定した社会とはどのような社会であらうか。K・ヒースマンによれば、安定した人口をもつこと、全く同じ物を生産し、消費すること、平和であること、自然災害から免れていること、同じ方法で思考を続けたり、同じ神を崇拜し続けること、外部の人間社会との接触がほとんどないことなどである (Hesman, K., 1973, p. 130)。このような社会をわれわれの現実の社会に見出すことはほとんど不可能である。無文字社会 (non-literate society) であり、長い時間をかけて非常にゆっくりと変わるのである。しかし、極めて短時間の間に變動を経験した社会の方が理解しやすい。たとえば、大化改新、明治維新および戦前・戦後の日本といった変化の方が江戸時代のそれよりも理解しやすい。というのは、變動の要因やプロセスをヨリ明瞭な姿でわれわれに見せてくれるからである。また個人のレヴェルにお

いても、通常でないパーソナリティの方が通常のそれにも増して多くの示唆を受ける。

ところで、われわれは社会構造の変化をどのような次元で考えるべきであろうか。支配的な変動要因は何か、変動には方向があるのか、あるとすればどのような方向へのどのようなプロセスなのか、などを歴史Ⅱ非歴史的、つまり超歴史的に説明することができたならば「社会変動論」から「社会変動の理論」へと一般化のレヴェルが高まることになる。社会学の場合、一般化といっても自然科学のレヴェルや因果関係と因果連関の定立といったあたかも社会の論理学のレヴェルを意味するものではない。しかし、高田保馬の基礎社会における「拡大縮少の法則」や「衰耗の法則」は極めて論理整合性を重視し、一般化のレヴェルが高い。実際、かれは社会学を法則定立のための分析科学として規定するのである〔高田保馬、改版一九七一〕。社会変動を具体的なレヴェルで見ると、まず抽象的なレヴェルで変動の分析次元を考えてみよう。A・H・ガルトらがいうようにパースペクティヴ（研究が始められようとするとき研究者がつくる一クラスの前提）のカテゴリのなかで最も重要なものは時間、分析レヴェル、視点に対する態度決定（orientation）である〔Galt, A. & Smith, L., 1976, p. 33〕。この小論では分析レヴェルを中心に論を進めたい。一つは社会（構造）の中での変化（change within society）と社会（構造）それ自体の変化（change

of society）との問題であり、他は内的ダイナミクスと外的ダイナミクスとの問題、すなわちこの二つである。

三、社会の中の変化と社会の変化

われわれが考察する社会変動のタイプや大きさを限定するためにここで変動の二つのタイプ、つまり「社会の中での変化」と「社会の変化」とを区別しておこう。社会の中での変化とは社会（構造）そのものは変わらないで、その構成要素および要素間の関係が変わることである。その場合、社会の内部あるいは外部からの何らかの変動要因ないし要因間の連関によって、その社会（構造）が短期的ないし長期的に変わるということを意味し、いわばさざ波（ripple）のようなものである。たとえば外部の人間社会から何らかのインパクトがあったとしても、内部で調整（adjustment）される。このことは直ちに社会（構造）というものはある程度まで弾力性をもっているという考え方やホメオスタシスの概念と結び付くであろう。均衡モデルの一つである機能分析は基本的にこのホメオスタシスを基礎にしている。そこでは社会（構造）の維持に対する外部からのインパクトや内部に生じた緊張は飽くまでもさざ波、波動といった程度の出来事であり、それらのインパクトや緊張はある程度までその社会（構造）によ

って裁可 (sanction) されるのである。社会 (構造) の維持を
一見妨げると思われる要素は時として社会 (構造) の存続
の要素にもなる (Nisbet, R., 1970, 訳、一九七七)。そうい
った要素は變動にとつて順機能とともに逆機能を、顕在的機
能とともに潜在的機能をも、もつのである。もちろん、この
さざ波や波動が同調して大波となり社会 (構造) という大船
を転覆させることもある。その場合、A 構造から B 構造への
移行となり、われわれはこれを本来の意味で社会變動という
ある社会構造から他の社会構造への移行をわれわれは考える
〔野口隆、一九七五〕。

右で述べたように、結局、社会の中での変化は本質的にそ
の社会の内部の調整から構成されており、比較的小さい同質
的な集団内部の研究には有効であるが、ヨリ大きな社会との
係わりや外部の人間社会からのインパクトを研究する場合に
は不適にならざるを得ない。それ故、われわれはある社会構
造から他の社会構造への移行を社会變動として理解するの
である。その場合にも、一挙に社会段階論に進むのではなく、
飽くまでも類型論に留まる。それこそわれわれの今の社会学
の立場であるから。社会の変化は社会の中での変化よりも大
きい。それは社会の組織や構造を再編成するような大規模な
変化であり、単に内部の再調整ではない。たとえば、中世の
日本と第二次大戦後の日本とは明らかに同じ構成要素からな
る社会ではない。この二つの社会の間には時間があり、歴史

がある。社会学はともすれば現実をシンクロニクなもの
として強調しがちであるが、もう少しダイアクロニクな側面
をも取り入れることが必要であらう。以前の社会からの、ま
た外部社会からのインパクトを無視して社会の中での変化の
みを見ることは、非歴史的に社会をとらえることである。所
与の社会は時間という次元においても、空間という次元にお
いても常に動いている。それ故、われわれは社会の中の変化
ではなく社会の変化を變動として理解するのである。

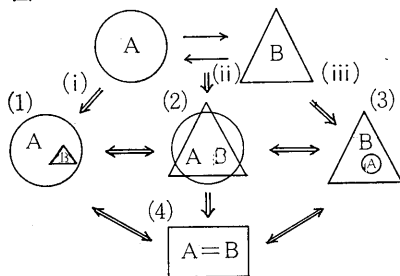
四、内的ダイナミクスと外的ダイナミクス

ある社会の中の小さなひずみが累積してやがて社会が変
わっていくのか、それともその社会の外部からのインパクト
によつて社会は変わるのかという問題である。この二つはあ
れかこれかといった二者択一的なものではなくて、むしろ変
動によつて相乗的なものであらう。内的ダイナミクスは閉鎖
システムや社会の中での変化と、外的ダイナミクスは開放シ
ステムや社会の変化とほぼ対応関係がある。内的ダイナミク
スは外部社会との構造連関を括弧に入れた閉鎖システムを考
えるが、今日では外部社会とのコンテクストをもたない社会
は現実には考えられない。無文字社会においても外部社会から
何らかのイン・プットがある。バランディエ教授はアフリカ
のセネガルの漁業民族であるレブウー (Lebou) 族を調査した

際、他の部族や植民国といった外部社会とどのような係わりをもち、どのようなインパクトを受けたかをみなければ、その社会を解明しえないという（一九七七・一一・二、関西学院大学社会学部でのミーティング「バテンディエ教授を囲んで」から。なお、野口隆氏、一九七二、一九七五、一九七七に詳細な検討がなされている）。内的ダイナミクスだけでは社会は、ましては変動は理解できない。外部社会のどのような要素がその社会のどのような要素と係わりをもつかを考えなければならぬ。社会の顕在的な要素のみが係わりをもつのではなく、潜在的な要素が係わりをもつ場合もあるし、その社会の歴史的な要素と係わりをもつ場合もある。そして、これらの諸要素がすべて同時に係わるのではなく、あるずれをもつて係わる。たとえば、オイル・ショックに対して経済は直ちに反応しても、宗教は殆ど反応を示さない。急激な変動に際し、潜在的な要素や一見消滅したと思われる歴史的な要素が表出したり、作用したりすることがある。要素という種は水と温度と光があれば発芽するのである。内的ダイナミクスを外的ダイナミクスと関連させて考える場合、内的ダイナミクスにおける潜在性・準備性を考えることは重要である。いかに外部社会からのインパクトがあろうと内部の社会（構造）が強固であればインパクトはUターンするか、内部社会を解体させるかのいずれかである。個人のレヴェルにおいても、実際、人間と人間との関係、男と女との関係はそのようなものであろう。

二つの異なる社会間の外的ダイナミクスの単純な形態を図示すればつぎのようになる（第一図参照）。

図1 外的ダイナミクスの方向



上の図は極めて単純化してあるので、現実を適切に表わすものではないかも知れない。しかし二つの社会間のダイナミクスにおいてどのようなタイプの接触（contact）が支配的であるかをみる場合には有効である。 (i) のプロセスは A の B に対するインパクトが極めて大きい、あるいは質量ともに重要な要素を含んでいるかであり（push の側面）、同時に B においても何らかの準備性をもっている（pull の側面）場合である。その場合、B が完全に消滅してしまうと考えることは現実的でない。B の要素は潜在化する、あるいは形を変えて浸透するかして A の中で生き続ける（図では (1)）。しかし、A の中に潜在化した B がある状況のもとに顕在化する可能性も考えられる（図では (2) ないし (4) へ、また時には (3) への変化）。 (ii) のプロセスは A・B 間の相互浸透（interpenetration）がいわば半半で進行した場合である。この結果として、仕切り（compa-

rtmentalization) なご二元的固定 (stabilized dualism) が考えられる (図では②)。こういった仕切りが維持されることもあれば、また長い間にはAないしBのいずれかの要素がドミナントになる場合もあるし (図では①ないし③) への変化)、さらに別の社会 (構造) になる可能性も生じる (図では④への変化)。たとえば、社会関係のレベルでは婚姻、集団レベルでは企業間の合併などが具体性をもつであろう。③のプロセスはAのBに対するインパクトが極めて小さいか、あるいは重要な要素を含んでいないかであり、Bにおいても顕在的・潜在的な何らかの準備性をもたず極めて堅い (rigid) 構成要素からなる社会 (構造) である場合の例である。その場合、AのインパクトがBの表層に触れただけであっても、たった一粒の汗でもそれが落ちた地面は湿めるように、Aの要素はBの中へ浸透する (図では③)。しかし、Bの中に潜在化したAがある状況のもとに顕在化する可能性も考えられるのである (図では②ないし④) へ、また時には①への変化)。

註

Galt, A. & Smith, L., 1976, *Models and the Study of Social Change*, Schenkman Publishing Co. Inc.

Hesman, K., 1973, *The Study of Society*, George Allen & Unwin Ltd.

Marindale, D., 1960, *The Nature and Types of Sociological Theory*, 訳者代表、新 陸人、一九七四、現代社会学の系譜、未

来社。

Merton, R., revised 1957, *Social Theory and Social Structure*, 森東吾・森好夫・金沢実・中島竜太郎訳、一九六一、社会学理論と社会構造、みすず書房。

Nisbet, R., 1970, *The Social Bond: An Introduction to the Study of Society*, 南 博訳、一九七七、現代社会学入門(一) 講談社。特に③へ。

野口隆、一九七二、一般社会学の諸問題、関書院新社。特に第四編、社会変動の問題。

野口隆、一九七五、動的社会学、晃洋書房。特に第一章、社会学の方法、第二章、社会弁証法、第三章、一般システム理論、と弁証法にこの小論はおかけを受けている。

野口隆、一九七七、「社会構造」から「社会変動」へ、佛大社会学、第二号、佛教大学社会学研究会。

Rudner, R., 1966, *Philosophy of Social Science*, 塩原勉訳、一九六八、社会科学の哲学、培風館。

高田保馬、改版一九七一、社会学概論、岩波書店。

Zetterberg, H., 3rd 1966, *On Theory and Verification in Sociology*, 安積仰也・金丸由雄訳、一九七三、社会学的思考法——社会学の理論と証明、ミネルヴァ書房。

(大学院博士課程)